

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 千葉県 】

1 実践テーマ	【 I III 】
2 実施対象者	学校名 千葉県立八千代高等学校 対象学年 体育科1～3年生 人数 120名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (専門体育) ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	パラリンピックについて学び、同種目等を体験することでパラリンピックや障がい者への理解を深めるとともに、共生社会を目指して他者を理解しようとする気持ちを育成する。
5 取組内容	(1)【オリンピック・パラリンピック学習支援講座】 (H29.10.30, 5・6限, 体育講義室) 演題：日本における障がい者スポーツの歴史と今日 ～「パラリンピック」をキーワードとして～ 講師：東洋大学ライフデザイン学部 金子元彦 先生



「パラリンピック」の起源からその言葉の意味、そして日本の障がい者スポーツの歴史などを講義していただいた。パラリンピックの抱えるクラス分けの課題などについてもわかりやすい説明があり、多くの生徒にとって初めての気づきが多くあった。



また、車いすのこぎ方で障がいの部位や程度がわかることや、白杖を持った方に対してどのように接するか、電車の中で気にかけておくことなど日常生活で一人一人ができることをお話ししてもらった。

(2)【車いす体験・アイマスク体験と補助体験】

(H29.11.6, 5・6限, 体育講義室, 校庭)

指導：八千代市社会福祉協議会, 同地区ボランティアの方々



二人一組になり車いすに乗り校舎外周を移動する者と、補助をする者の両方の体験を行った。初めて車いすを見る生徒もいたので、車いすの取扱い方法から説明を受けスタートした。

段差は、補助者のサポート法を教えてもらい、降ろしてあげる体験をした。日頃、何気なく歩いている石畳のでこぼこも、車いすで通る際にはかなりの障壁となることに気づくことができた。また、補助者はコミュニケーションをとりながらサポートすることの重要性を学ぶことができた。

アイマスク体験も二人一組で実施した。始めに、白杖の説明やサポートする人の立ち位置、方向を指示するときの声のかけ方などを学び、体育館周りを1周する体験をした。途中、体育館入り口の階段を昇降する箇所では、アイマスク体験者は白杖と補助者の声を頼りに恐怖心をこらえながら歩き、補助者はどう指示して良いか声かけの難しさを経験した。両方の体験から、補助をするときに相手に合わせることや、わかりやすい指示の大切さなどを学ぶことができた。

(3)【シッティングバレーボール体験】(H29.11.20, 5・6限, 体育館)

① 事前学習



専門チームの講義前に、前年度の体験者が指導役となり展開した。円陣パスからバドミントンコートでの簡易ゲームを実施した。体の移動が予想以上に難しく、ラリーがなかなか続かなかった。ボールの落下地点に素早く移動する方法や、前に落ちるボールに対して臀部を上げないでレシーブする方法など、競技に特有な課題が多く見つかり、取り組みへの意欲と関心が高まった。

② 専門チームによる体験学習

講師：千葉パイレーツ

(H29. 11. 24, 5・6限, 体育館)



シッティングバレーボールの特徴でもある、臀部を床につけたまま前後左右にスムーズに移動するための練習を行った。



バレー部員を中心に円陣になり、パスが何回続くか4チームで競った。

(前に落ちるボールに対するレシーブの練習)



正式なコートを作成し、ゲームを行った。

(得点を決めてチームで喜ぶ様子)



ラストは千葉パイレーツ対八千代高校の対決。

強烈なスパイクを何本も体験することができました。

(日本チャンピオンチームから点を取って喜ぶ様子)

障がいの有無に関わらず、一緒に競技できるシッティングバレーボールを体験できた。同競技が千葉県内で開催されるということもあり、直に観戦したいという感想や、他のパラリンピック種目への関心が広がった。

	<p>(4)【スポーツの価値を基盤とした授業づくり】 (H29.11.30, 5限, 体育科2年教室)</p> <p>公開授業：「アンチ・ドーピングを通して考える」 授業者：玉屋 裕基 教諭 講評：公益財団法人 日本アンチ・ドーピング機構 教育・国際部国際企画グループ 高須 久望子 氏</p> <p>体育科2年生(40名)を対象に、ドーピングとは何か、ドーピングの歴史的背景や事例・方法などについて学ぶ。 なぜドーピングが禁止されているかを、スポーツの価値やフェアプレイの面からグループディスカッションし、様々な考え方を共有した。 アンチドーピング活動について理解を深められ、とるべき行動について正しい選択ができるようになった。</p>
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・海外での事例を学び、まさにグローバルな課題であることが理解できた。 ・事前アンケートでは、東京2020パラリンピック競技大会に関心がありますかという質問に対して、とても関心がある〈37.9%〉・関心がある〈47.4%〉という回答で肯定的意見は〈85.3%〉であった。振り返りアンケートで同様の質問をしたところ、とても関心がある〈62.1%〉・関心がある〈37.1%〉となり、肯定的意見は〈99.2%〉と13.9%も増加したことから、パラリンピックに関心を持つ生徒が大幅に増えたと考えられる。 ・振り返りアンケートの設問で、『『オリンピック・パラリンピック教育の目標に人種、性別、障害の有無など、あらゆる違いを認め尊重し合い、共生社会を創造する資質・能力を育成する』とありますが、自分でどれくらい身についたと感じていますか』という質問に対して、身についた〈52.6%〉・概ね身についた〈46.6%〉となり、99.2%の者が肯定的意見を有する結果が得られた。
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・取り組みの順序を工夫した。まず講義でパラリンピックについての歴史や課題、障がいを持つ人に対して日常生活で留意する点を学び、実際に車いす・アイマスク・補助体験をすることで学んだ事を実際に体験させた。 ・車いす・アイマスク体験で二人一組を作る際には異なる学年・部活動でペアを作らせ、上手くコミュニケーションが取れないと進めないようなペアリングにした。 ・シッティングバレーボールは、1時間にひとクラス展開で行ったことで、生徒の各チームに千葉パイレーツの方が一人加わり、専門的な技術指導をしていただいた。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は体育科生徒のみでの実施となってしまったが、次年度は普通科・家政科でも取り組めるようにしたい。 ・経費の関係を踏まえて講師を探さなければならなかったこと。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・普通科や家政科の生徒にもシッティングバレーボールを体験させ、パラリンピックが身近に感じられるように方向づけしていく。 ・東洋大学事業の「オリンピック・パラリンピック学習支援講座」に応募し講師派遣を依頼したい。